



清田区 研究実践園研究事業
研究だより

札幌市立認定こども園にじいろ
研究だより 第3号
令和6年9月30日(月)

認定こども園にじいろ・かっこう幼稚園 研究重点
心を動かし、思いをもって遊び込む幼児を育むための保育者の援助と環境構成

実践事例 5歳児 らいおん組『いろいろな場づくりに挑戦』



自分たちだけの場所からひろがる遊び

春の頃から廃材やマルチパネルを使って家や学校をつくって遊んでいた5歳児。その時々でつくるものは変わっていましたが、『自分たちだけの場所』をつくることを楽しんでいる様子でした。様々な素材を用いて重ねたり、組み合わせたりすることをもっと楽しむにはどうしたらよいのか、継続して何度も取り組めるようにするにはどのような環境構成がよいのか、子どもたちの様子を見守っていたところ、遊びが動き始めました。

長時間保育では(異年齢活動)



部屋の壁を使って、家をつくろう！トンネルにしてもいいかも！



5歳児



2歳児

何しているんだろう。おもしろそう！入れてほしいな。



2歳児も入ってみたいようだね。

いいよ！ここに積み木を乗せるんだよ。



5歳児



カラー積み木の扱い方を5歳児は知っているのに異年齢でも一緒に遊べるのではと考え、2歳児の生活空間に持ち込みました。すぐにイメージを言葉にして家づくりが始まり、それを興味深そうに2歳児も見えていました。ちょうど2歳児も家ごっこやままごとを楽しんでいたため5歳児に関わりを促してみたところ、やり方を教えたり、つくってあげたりする姿がみられました。

2歳児に「すごい」「お家だ」と喜んでもらい、満足感や達成感を感じている様子でした。

教育時間では（年齢活動）



先生、また積み木やりたい！



いいんだけど…せっかくなのに壊すのはもったいないよね。5歳児の部屋にあればとっておけるのにな…



えっ？いいの！持ってこよう！



遊びが継続する環境を整えることで…



おはよう！今日も積み木しよう！



ご飯を食べ終わったら積み木の続きをしよう！



別の日の朝、積み木遊びが楽しかったことを思い出してやりたいと話す姿がありました。長時間保育での積み木遊びの様子も踏まえ、興味をもっている、遊びに夢中になるチャンスと考え、“どうしたら取っておけるのか”を子どもたちと一緒に考えました。保育者の言った一言が子どもたちには意外だったようで、驚きながらもワクワクした表情で積み木を運び始めました。

保育室に積み木が運ばれた日から家や楽器など形を様々に変えながら、場づくりを楽しんでいます。保育室に常にある安心感を感じられるよう、“壊れてしまってももう一回つくろう”“失敗しても直せば大丈夫”“明日もまたやってみよう”と保育者が関わっていくことで、次第に失敗を恐れずに前向きに遊びに向かう姿が見られるようになりました。

～職員の話し合いより～

◎保育者の考えの柔軟性

「カラー積み木はホールにあるものだから、他の場所へは運べない」のではなく、『部屋に持って行って遊ぼう！』としたことで、“ホールで遊ぶもの”ではなく、“いつでも遊べるもの”になりました。そうすることで、「壊れてもまた遊べる」「いつでもつくり直せる」という安心感が子どもたちの中で生まれ、時々遊びに来る他年齢の子も仲間に入ったり、壊れたりすることに対する抵抗が少なくなりました。また、保育室内で完成した作品をとっておくことができ、遊びの継続とひろがりにもつながりました。

◎遊びがひろがるには、時には条件も必要

遊びの継続やさらなる発展を見込んで場を取っておくことは多くありますが、すべて遊びを取っておくことはできないため、時には片付けなくてはならないこともあります。しかしそれは悪いことではなく、「次はこんな風につくってみよう」、「代わりに使えるものはないかな」と考えるなど、子どもたちが思考を巡らせながら遊び込むきっかけになると考えました。

◎異年齢で育ち合う姿

様々な素材を使って場づくりを楽しんでいた5歳児の先行経験は、他クラスの子どもたちにアドバイスをしたり、小さいクラスの子どもたちがいても楽しめる場づくりを提案したりという、相手を思いやる気持ちの育ちにつながりました。また、小さいクラスの子どもたちにとっても楽しい場をつくってくれる5歳児は憧れの存在となり、喜んで5歳児の保育室へ遊びに行く姿も見られていました。

実践事例 5歳児 らいおん組『バルーン発表会』

2か月の間、夢中になってバルーンに取り組み、運動会で発表し大成功を納めました。終わってから「またやりたい」「新しい曲をやりたい」と意欲を見せ、新技を含む新曲に挑戦することになりました。バルーンを楽しみつつ、いろいろな思いから活動が展開されました。

新技がおもしろい！



難しいけどバルーンの動きがおもしろい！



なんでいつも同じように失敗するのだろう？

他クラスに「すごい」と褒められる機会が多く、年長だからこそできる特別感を感じていました。また、失敗もチャンスと捉え、どうすればできるのかみんなで考えていけるよう問いかけながら活動を展開させていきました。



お家の人に見てもらいたい！



運動会のときのようにお家の人に見てもらいたいな。



いいね。先生たちは運動会の前にお家の人にお知らせの手紙をかくて渡したよ。



手紙をかくてみたい。どうやってかくのか教えてほしいな！

保護者に見てもらいたいと子どもたちから発信がありました。運動会のときをイメージしていたようだったので、手紙をかくことを提案すると興味をもちました。必要性を感じ、文字をかいたり、絵で表現したりする姿がみられました。また、返事を集めるポスト制作にもつながっていきました。



発表会の司会進行も挑戦！



ところで発表会はどうやって進めるのかな？



司会も自分たちでやってみよう！



運動会でやった体操をまたやったら楽しそう！

答えに子どもたち自身でたどり着けるよう保育者がヒントを与えていきました。また、アイデアに対しては「いいね」「なるほどね。こんなときはどうする？」など問いかけていくことで子どもたち自身でまた思考する姿につながっていきました。子どもたち自身で決めた発表会の内容だったので、それぞれの役割に責任感を感じながら取り組みました。



～職員の話し合いより～

◎いかに自分たちでつくり上げていくか。

この事例では保育者が陰で様々な援助をしながら、考えたり、決めたりするのは子どもたち自身でできるよう保育を展開していました。保育の展開を予想し、保育者間で十分に計画を立て進めていくことが大切ですが、その中でいかに自分たちで考えた、やり遂げたという気持ちをもてるよう働きかけていくのかということが子どもたちの主体性、夢中になって遊ぶ姿につながっていくと考えました。

◎憧れる姿が伝承につながっていく。

年下の子が5歳児がバルーンを楽しんでいる姿を生活のいろいろな場面で目にしていました。「すごい！大きくなったらできるんだ」と話す姿もみられ、部屋でバルーンを模倣するなど憧れる様子が感じとれました。感動したり、憧れたりする気持ちはきっと成長につながっていきます。憧れの気持ちを十分に受け止め、年長から年中へ一緒に取り組んでいく中で伝承していきたいと話しました。